

ポー・カレン語（東部方言）の関係節

加藤昌彦

キーワード: カレン語, ポー・カレン語, 関係節, チベット・ビルマ諸語

概要

ポー・カレン語東部方言の関係節には「後置型」「前置型」「標識介在型」の3つがある。これらの使い分けの条件を探るのが本稿の目的である。筆者の資料を調査した結果、主要部名詞が関係節の主語に相当する場合は後置型が多く使われること、主要部名詞が非主語の場合は前置型が多く使われること、標識介在型が使われる頻度は低いこと、などが明らかになった。¹

内容

1 序論

2 ポー・カレン語の関係節の定義と種類

2.1 後置型

2.2 前置型

2.3 標識介在型

2.4 主要部内在型の関係節は存在するか？

3 調査と考察

3.1 関係節の使用の実態

3.2 後置型と前置型

3.3 標識介在型

4 まとめ

1 序論

カレン諸語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属するとされる言語群で、ビルマ（ミャンマー）およびタイで300万から400万の人々によって話されている。他のチベット・ビルマ系言語の大部分がSOVを基本語順とするのに対し、カレン諸語の基本語順はSVOであり、この系統の諸言語の中では特異な存在となっている。カレン系言語には10を下らない種類の言語が知られているが、狭義のカレン語にはスゴー・カレン語（Sgaw Karen）とポー・カレン語（Pwo Karen）のみが含まれる。ビルマで話されるポー・カレン語は、イラワジ・デルタ周辺で話される西部方言と、カレン州およびテナセリム管区周辺で話される東部方言に大きく分けることができる。両者は意志疎通がほとんど不可能である。本稿で扱う方言は、東部方言のうちカレン州の州都パアン（Hpa-an; Burmese /phəʔàn/, East Pwo Karen /thəʔàn/) 周辺で話される方言で、この地域における最も主要な言語である。以下、ポー・カレン語と言う場合、このパアン周辺で話される東部方言

¹本稿は2000年9月30日に国立民族学博物館で行われたビルマ研究会WEST(田村克己教授主催)で行った発表に基づいている。研究会の席上、貴重な御意見をたまわった藪司郎先生、速水洋子先生をはじめとする参加者の方々に御礼を申し上げたい。

を指す。本稿の目的は、ポー・カレン語に見られる3種類の関係節「後置型」「前置型」「標識介在型」の使い分けの条件を探ることである。

ポー・カレン語の基本語順は、他のカレン系言語の例にもれず SVO である。節の構成はあらし次のようになっている。

主語——動詞前接辞-動詞-動詞後接辞——目的語——副詞的要素

下に例を示す。

jə-	mə-	ʔán	báθà	khòθá	lə-	pəjə̀nkhā̀n	ʔá	blàn
1sg	IRR	食べる	(希望)	マンゴー	LOC	ビルマ	多い	回
主語	動詞前接辞	動詞	動詞後接辞	目的語	副詞的要素		副詞的要素	

「私はビルマでマンゴーを何回も食べたい」

動詞の部分には動詞連続(加藤 [1998] で連結型動詞連続と呼んだもの)が現れることもある。動詞に動詞前接辞や動詞後接辞がついた全体を「動詞複合体 (verb complex)」と呼ぶ。この動詞複合体の直前に置かれる名詞句を「主語」、直後に置かれる名詞句を「目的語」と呼ぶ。目的語は、授受を表す文などで2つ現れることもある。その場合の語順は“動詞 + 受領者 + 対象”である。副詞的要素には、副詞、前置詞に後続する名詞句、助数詞句などを含む。このうち、名詞的性質を持った要素である、「前置詞に後続する名詞句」および「助数詞句」を「付加的補語」と呼ぶ。また、動詞前接辞を含むそれ以降の要素全体を「述部」と呼ぶ。

次に、本稿の論点である関係節は名詞句の中に現れる要素なので、ここで名詞句の構成について少し見ておく。名詞、状態動詞、助数詞句および指示代名詞などの名詞句内での基本的な語順は“名詞 + 状態動詞 + 数詞 + 助数詞 + 指示代名詞”と表せる。下に例を挙げる。

(1) ʔələ̀nphú ʔə̀nkhài lə- béin jò
 九官鳥の子 愚かな 1 羽 この
 「この一羽の愚かな九官鳥の子」

実は、この例で名詞に後置されて名詞を修飾している状態動詞 ʔə̀nkhài 「愚かな」のような要素も、本稿では「関係節」に含む。後で述べるように、関係節はこの例のような動詞単独の場合は多く名詞に後続するが、動詞単独でない場合にはしばしば名詞の前に置かれる。

2 ポー・カレン語の関係節の定義と種類

ここで、「関係節」の定義を行っておく。ポー・カレン語には、「名詞句」と「動詞文として成立可能な構造」が並置され、全体として名詞句になる構造が、次に図示するように2種類ある。

- (a) [名詞句 [名詞句] [動詞文として成立可能な構造]]
- (b) [名詞句 [動詞文として成立可能な構造] [名詞句]]

(a) と (b) の違いは、[名詞句] と [動詞文として成立可能な構造] の順序である。このような構造における [動詞文として成立可能な構造] の部分を「関係節」と呼ぶ。また、[名詞句] の部分を「主要部名詞」と呼ぶ。なお、(a) の場合には、関係節を導く助辞 *lə-* が介在する [名詞句 [名詞句] *lə-* [動詞文として成立可能な構造]] のような構造も含む。

これがポー・カレン語の関係節の定義である。この定義にあてはまるものには次のものがある。

- 1) 関係節を表す標識が現れないもの。これには次の2種類がある。
 - 1-1) 関係節が主要部名詞の後に現れるもの。これを「後置型」と呼ぶ。
 - 1-2) 関係節が主要部名詞の前に現れるもの。これを「前置型」と呼ぶ。
- 2) 関係節を表す標識が現れるもの。これを「標識介在型」と呼ぶ。関係節は常に主要部名詞の後に現れる。

この3種類のうち、1-1の「後置型」と2の「標識介在型」が上の定義の(a)に相当し、1-2の「前置型」が(b)に相当する。このように、ポー・カレン語の関係節には、関係節が主要部名詞の前に置かれるものと後に置かれるものがある。

ところで、語順の普遍性についての先駆的研究である Greenberg (1966:91) は次のように述べる。

Universal 24 If the relative expression precedes the noun either as the only construction or as an alternate construction, either the language is postpositional, or the adjective precedes the noun or both.

つまり、関係節を名詞の前に置くことができる言語は、後置詞を持つ、ないしは、形容詞を名詞の前に置くということである。ポー・カレン語の場合、前置詞は持つが、後置詞は持たない。また、*adjective* という用語を、ポー・カレン語においては「単独で現れた状態動詞」と解釈することにすれば、後で見るように、単独で現れた動詞は名詞に後続するので(ただし主要部名詞が主語に相当する場合)、形容詞は名詞の前には置かれないということになる。したがって、ポー・カレン語は、Greenberg の提案した普遍性への反例となる可能性がある。

以下では、上で示した「後置型」「前置型」「標識介在型」の具体例を見ていく。なお、関係節を含む名詞句全体の後には、しばしば指示代名詞の *nó* 「その、あの」が置かれる(逐語訳は *that*)。

2.1 後置型 (postnominal type)

後置型は、名詞の後ろに直接置かれるタイプの関係節である。

- (2) *pəcā* [*lāinlòn* *lə-* *phənθà* *nàin*] *ləphá*
 人 行き来する LOC 道 端 *pl*
 「道ばたを行き来する人」(I-08.8)

- (3) ʔəcá [pətòN lə- já]
 人生 築く LOC 前
 「これから築く人生」(IV-03.11)
- (4) cì [mə- xwè ʔáN kháuchwē]
 金 IRR 買う 食べる ソバ
 「ソバを買って食べる金」(V-03.88)

後置型の関係節は述部のみからなる。次のように主要部名詞と関係節の間に主語が入ることはできない。

- (5) *cì [jə- mə- xwè ʔáN kháuchwē]
 金 1sg IRR 買う 食べる ソバ

2.2 前置型 (prenominal type)

前置型は、名詞の前に置かれるタイプの関係節である。後置型と違って、関係節は主語を伴ってもよい(主要部名詞が関係節内の主語に相当する場合を除く)。

- (6) [ʔó phlòUN khānkəNāN phèn] khólòNphàθəN
 ある カレン 州 中 ドーナ山脈
 「カレン州にあるドーナ山脈」(V-06.8)
- (7) [jə- θòUN] lái nó
 1sg 送る 手紙 that
 「私が送った手紙」(V-04.5)

なお、まれではあるが、後置型および前置型の主要部名詞はゼロになる場合がある。

- (8) φ [ʔó thōNjò] nó jə- báθà
 ある ここ that 1sg 欲しい
 「ここにあるやつが私は欲しい」
- (9) [jə- ʔáNphôn dá] φ nó
 1sg 炊く (保持) that
 thàIN chó wái θà
 帰る 運ぶ (徹底) さあ~せよ
 「私が炊いたの(ご飯)をさあ持って帰りなさい」

ただし、このようなゼロ名詞の使用は、文脈によってゼロ名詞が何を指示するのが明らかの場合にのみ限られる。また、「正しくない」用法と見なされることもあるようである。

2.3 標識介在型 (marked type)

標識介在型は、後置型と同様、主要部名詞の後に置かれるタイプの関係節である。後置型との違いは、関係節を導く助辞 *lə-* が関係節の前に置かれるということと、関係節の主語が現れ得るということである。

- (10) θéinθá thí *lə-* [ʔə - yì] nó
 果物 水 *Lə* 3sg 良い that
 「良い果物ジュース」(II-13.17)

- (11) khānməpā *lə-* [ʔəwé thòn bá] θè nó
 外国 *Lə* 3sg 着く (経験) pl that
 「彼が行ったことのある外国」(V-04.49)

標識介在型において特徴的なのは、(10) に下線で示したように、関係節化された名詞に対応する代名詞が関係節内で繰り返されるということである。他の例を挙げる。

- (12) θàimū *lə-* [ʔə - mà yà yòn bú] θílepá nó
 幼虫 *Lə* 3sg する 壊れる 稲 pl that
 「稲を食い荒らす幼虫」(II-01.16)

- (13) chəkhlichəθá *lə-* [ʔə - lənkəu lənkéin] θí
 種 *Lə* 3sg こぼれる こぼれる pl
 「こぼれた種」(II-04.6)

- (14) phlòun *lə-* [jə- dú ʔə] nó
 人 *Lə* 1sg 殴る 3sg that
 「私が殴った人」

- (15) phlòun *lə-* [jə- lì dè ʔə phléphlé] nó
 人 *Lə* 1sg 行く INS 3sg 一緒に that
 「私が一緒に行った人」

ただし、下に見るように、代名詞の存在は必須ではない。

- (16) búixā *lə-* [mà yà yòn bú] θílepá nó
 米の虫 *Lə* する 壊れる 稲 pl that
 「稲を食い荒らす虫」(II-01.15)

- (17) phlòun *lə-* [jə- dú] nó
 人 *Lə* 1sg 殴る that
 「私が殴った人」

- (18) phlòun *lə-* [jə- lì phléphlé] nó
 人 *Lə* 1sg 行く 一緒に that
 「私が一緒に行った人」

2.4 主要部内在型の関係節は存在するか?

ところで、次のような例は、一見、主要部内在型関係節 (internal relative clause; cf. Keenan 1985) であるかのように見える。²

- (19) máimái tháu chàinkè ʔəkhájò nó
(人名) 乗る バイク 今 that
「マイマイが今乗っているバイク」(ビデオ劇 *khúʔwàjānlúthò* の台詞)

もし、主要部内在型だとすると、次のような構造を持つことになる。(下線部が主要部名詞)

- (20) [máimái tháu chàinkè ʔəkhájò] nó
(人名) 乗る バイク 今 that

しかし、次に挙げる (a) は適格だが、(b) は非文法的である。

- (21) a. [jə- tháu lə- dàu phèn] khánphài nó
1sg はく Lə 部屋 中 草履 that
「私が部屋の中ではいている草履」
- b. *[jə- tháu khánphài lə- dàu phèn] nó
1sg はく 草履 Lə 部屋 中 that

(a) は前置型の関係節である。(b) が非文法的なのは、前置詞句 *lə- dàu phèn* 「部屋の中で」が主要部名詞 *khánphài* 「草履」の後ろに現れているため、関係節の後ろに置かれるべき主要部名詞が関係節内部に置かれた形になってしまっているからだと考えられる。したがって、ポー・カレン語に主要部内在型関係節は存在しないと見るべきである。おそらく (19) は、前置型の関係節であり、次のような構造を持つと考えられる。

- (22) [máimái tháu] chàinkè ʔəkhájò nó
(人名) 乗る バイク 今 that

ʔəkhájò 「今」は、*chàinkè ʔəkhájò* 「今のバイク」が言えることから、*chàinkè* 「バイク」のみあるいは *máimái tháu chàinkè* 「マイマイが乗っているバイク」全体を修飾する名詞句であり、関係節内部の要素ではないと考えるべきだろう。

3 調査と考察

3.1 関係節の使用の実態

ビルマのポー・カレン語の文法について少しでも言及した数少ない先行研究のうち、Purser and Tun Aung (1922) は、形容詞が名詞を修飾する例として後置型に相当する例を挙げるものの、名詞を修飾する節 (Purser and Tun Aung は adjective clause と呼ぶ) としては標識介在型の次の例のみを挙げている (p.216)。前置型についての報告はまったく

²チベット・ビルマ系の言語では、チベット語などに主要部内在型関係節が存在するとされる (白井 [1998] 参照)。

ない。この理由としては、扱った方言が違う可能性および歴史的変化による差異の可能性がある。当時の発音は分からないため、翻字により示しておく。³

(23) < li4 lA0 [y pha0 kwe5 we3] nO2
 本 Lə lsg 父 書く (強調) that

qO2 lA0 c pwE1 kho2 lO3 >
 ある LOC 机 上 (丁寧)

「私の父が書いた本は机の上にあります」(翻字は加藤[印刷中]で用いた方式による)

しかし、上で既に見たように、現代のポー・カレン語東部方言においては3種類の関係節が使用されている。これらがいかなる条件によって使い分けられているのかを明らかにする必要がある。ところが困難なことに、同じ内容を表すのにこれら3種類の関係節すべてを用いることができる場合が少なくない。

(24) a. chəphúchəxā [mà yàyòn chə θí] nó
 昆虫 する 壊れる 物 傾向がある that

b. [mà yàyòn chə θí] chəphúchəxā nó (II-01.22)
 する 壊れる 物 傾向がある 昆虫 that

c. chəphúchəxā lə- [ʔə- mà yàyòn chə θí] nó
 昆虫 Lə 3sg する 壊れる 物 傾向がある that

「物(農作物)に損害を与える性質を持つ昆虫」

そこで筆者は、これらの使用の実態を知るために、(i) 主要部名詞の関係節における統語役割、(ii) 関係節の長短、(iii) 語彙化した名詞か否か、という3点に着目し、手持ちのテキスト資料(巻末に掲載)における関係節の延べ出現回数を調査した。(25)の表に示したのがその結果である。(i)から(iii)の観点について、以下に説明する。

●(i)の「主要部名詞の関係節における統語役割」は、主要部名詞が関係節の側から見てどのような統語役割を持つかという観点である。例えば、次の(a)における主要部名詞は、(b)の文を見れば明らかのように、関係節の主語に相当する要素である。なお、以後、「主要部名詞が関係節の主語に相当する」ということを、「主要部名詞が主語である」というように簡略に表現する場合がある(主語以外も同様)。

(26) a. phlòunchəphú [ʔó dòun θə̀̀̀̀̀̀̀̀̀̀̀ phèn] ləphá
 カレン民族 いる 町 タトン 中 pl

「タトンの町にいたカレンの人々」(III-08.9)

b. phlòunchəphú ʔó dòun θə̀̀̀̀̀̀̀̀̀̀̀ phèn
 カレン民族 いる 町 タトン 中

「カレンの人々はタトンの町にいた」

³Purser and Tun Aung (1922) はポー・カレン語の語彙集であるが、巻末にポー・カレン語文法の概略を載せている。表記は、加藤(印刷中)が「キリスト教ポー・カレン文字」と呼ぶ文字によって行っている。この本は残念なことに、東部方言を扱うと名言しているにもかかわらず、語彙集も文法説明も、東部方言の形式と西部方言の形式が入り交じっていて、区別がされていない。文法説明は、彼らの言葉とは逆に、むしろ西部方言の文法に偏向している印象がある。

(25) 関係節の出現回数 (主要部名詞の関係節内における統語役割別)

統語役割	関係節の種類	関係節の長短 (および語彙化しているか否か)
主語 (subject)	後置型 395 (89%)	長 72 (うち非語彙化 50, 語彙化 22)
		短 323 (うち非語彙化 175, 語彙化 148)
	前置型 32 (7%)	長 32 (うち非語彙化 31, 語彙化 1)
		短 0
	標識介在型 15 (3%)	長 13
		短 2
小計	442	(非語彙化 271, 語彙化 171)
目的語 (object)	後置型 13 (13%)	長 2
		短 11 (うち非語彙化 2, 語彙化 9)
	前置型 84 (84%)	長 81
		短 3
	標識介在型 3 (3%)	長 3
		短 0
小計	100	(非語彙化 91, 語彙化 9)
付加的補語 (adjunct)	後置型 8 (18%)	長 4 (うち非語彙化 2, 語彙化 2)
		短 4 (うち非語彙化 0, 語彙化 4)
	前置型 35 (80%)	長 35
		短 0
	標識介在型 1 (2%)	長 1
		短 0
小計	44	(非語彙化 38, 語彙化 6)
非節内要素 (non-clause internal element)	後置型 12 (41%)	長 6 (うち非語彙化 3, 語彙化 3)
		短 6 (うち非語彙化 6, 語彙化 6)
	前置型 16 (55%)	長 16
		短 0
	標識介在型 1 (3%)	長 1
		短 0
小計	29	(非語彙化 20, 語彙化 9)
所有者名詞 (possessor)	後置型 16 (59%)	長 16
		短 0
	前置型 11 (41%)	長 11
		短 0
	標識介在型 0 (0%)	長 0
		短 0
小計	27	(非語彙化 27, 語彙化 0)
総計	642	(非語彙化 447, 語彙化 195)

また、次の (a) における主要部名詞は、(b) の文を見れば明らかのように、関係節の目的語に相当する要素である。

(27) a. [pə- θí thá wè] láí nó
 1pl できる (結果の継続) (前もって) 文字 that
 「私たちが既に習得している文字」(IV-01.36)

b. pə- θí thá wè láí jò
 1pl できる (結果の継続) (前もって) 文字 この
 「私たちは既にこの文字を習得している」

また、次の各例の (a) における主要部名詞は、各 (b) を見れば分かるとおり、関係節の付加的補語に相当する。

(28) a. [jə- dú ʔəwè] lé nó
 1sg 叩く 3sg 棒 that
 「私が彼を叩いた棒」

b. jə- dú ʔəwè dè lé
 1sg 叩く 3sg INS 棒
 「私は彼を棒で叩いた」

(29) a. [nə- lə chə] ʔə- thí nó
 2sg 話す 物 (一般名詞化) 回 that
 「おまえが話す回数」(IV-04.291)

b. nə- lə chə lə- thí
 2sg 話す 物 1 回
 「おまえは一回話す」

ただし、名詞が目的語であるか付加的補語であるかを判断するのは時として難しい。

(30) [jə- lì] yéin nó
 1sg 行く 家 that
 「私が行った家」

というのは、この例における yéin 「家」は、動詞の目的語としても付加的補語としても出現可能だからである。次の文に見るように、前置詞 lə- は現れる場合と現れない場合とがあるのである。

(31) jə- lì (lə-) ʔə- yéin
 1sg 行く LOC 3sg 家
 「私は彼の家に行った」

本稿では、このような例は便宜的に目的語に含めて考える。

次のように、主要部名詞が関係節内のいかなる要素にも相当しないものもある。以後、このような名詞句を「非節内要素」と呼ぶ。

- (32) [phlòʊɴ dòʊɴləkòʊɴ θè lì thóʊɴlī tòʊɴ
 人 ヤンゴン pl 行く 踊る ドン
 lə- cínkəpù] bìdìʔòkhwè nó
 LOC シンガポール ビデオテープ that
 「ヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン [カレンの民族舞踊] を踊った (のを撮った) ビデオテープ」 (016.34)

最後の「所有者名詞」は次のようなものである。

- (33) ʔàìθàì [ʔə- nâ thô] nó
 仙人 3sg 鼻 長い that
 「鼻の長い仙人」 (III-04.5)

- (34) ʔàìθàì lə- [ʔə- nâ thô] nó
 仙人 Lə 3sg 鼻 長い that
 「鼻の長い仙人」

これは主要部名詞が関係節内の主語の所有者に相当するものである。次のような文の所有者が関係節化によって主要部名詞になったものという考え方ができる。⁴

- (35) ʔàìθàì ʔə- nâ thô mā
 仙人 3sg 鼻 長い (強意)
 「仙人の鼻は長い」

ポー・カレン語では、所有者名詞が関係節化できるのは、所有者名詞が主語の内部の要素であるときのみである。例えば次の文を見ていただきたい。

- (36) jə- θóʊɴ thìθò ʔə- yéin
 1sg 建てる 友人 3sg that
 「私は自分の友人の家を建てた」

この文の所有者名詞は目的語の内部の要素である。このような場合、所有者名詞を主要部とする関係節をつくることはできない。

- (37) *[jə- θóʊɴ ʔə- yéin] thìθò nó
 1sg 建てる 3sg 家 友人 that
 「私が家を建てた友人」

- (38) *thìθò lə- [jə- θóʊɴ ʔə- yéin] nó
 友人 Lə 1sg 建てる 3sg 家 that
 「私が家を建てた友人」

⁴ポー・カレン語では「X(所有者)のY(所有物)」を表すのに、“X + 代名詞 + Y”という表現がとられる。代名詞は、Xに対応する所有代名詞(正確には代名詞の前置形)である。例えば、chərá ʔə- láíʔàʊ(先生-彼の-本)「先生の本」など。ただし、chərá láíʔàʊのように、代名詞が用いられない場合もある。

• (ii) の「関係節の長短」は、関係節が動詞1個のみからなるかどうかという観点である。次の例で見ると、(a)が「短い関係節」、(b)が「長い関係節」である。このように、関係節が動詞のみからなる場合、短い関係節と考え、動詞以外の要素を含む場合には、長い関係節と考える。

- (39) a. thî khléin
 水 冷たい
 「冷たい水」
- b. thî khléin châ
 水 冷たい 大変
 「たいへん冷たい水」

• (iii) の「語彙化した名詞か否か」は、「主要部名詞+関係節」の構造が、語彙化したものかどうかという観点である。意味が特殊化し、個々の単語の意味からは全体の意味を導き出せなくなるという現象を語彙化と呼ぶ(影山 [1993:8] 参照)。語彙化したものは生産的な関係節とは別個に考えなければならない可能性があるので、この観点も考慮に入れた。以下に例を挙げる。

- (40) thílá [chôn] (塩+甘い)「砂糖」(I-02.13)
- (41) lōun [jì] (石+緑色の)「ヒスイ」(II-07.15)
- (42) thà [θəwài] (鉄+吸う)「磁石」(III-01.1)
- (43) já [?ú] (魚+腐る)「ガビ(魚醬)」(V-03.127)
- (44) mū [thán] (太陽+上る)「東」(III-17.21)
- (45) θôn [?ò] (おかず+飲む)「スープ」(V-03.47)
- (46) lái [thū] (文書+巻く)「貝葉」(III-08.10)
- (47) chəbóun [?án btúθânkú] (祭り+食べる+新米)「新米を食べる祭り(新嘗祭)」(III-14.3)
- (48) lân [làn ?ò thî] (雷神+下りる+飲む+水)「虹(下りてきて水を飲む雷神)」(II-10.1)
- (49) lái [jūkwè] (本+見て遊ぶ)「娯楽本」(III-07.12)
- (50) jwà [jū làn θà] (ガラス+見る+(下方)+(再帰))「姿見(自分を見るガラス)」(II-10.7)

以上に挙げた3つの観点のうち、(i)の「主要部名詞の関係節における統語役割」が最も重要な条件と考えられる。以下、この3つの観点に基づいて3種類の関係節を考察し、それぞれの特徴を明らかにしていきたい。

3.2 後置型と前置型

調査の結果を見ると、全体的な傾向として、Purser and Tun Aung (1922) にも挙げられた標識介在型の使用が少ないことが分かる。標識介在型よりも後置型あるいは前置型のほうが、現代のポー・カレン語東部方言においては、より一般的であると言ってもよいかもしれない。そこで、まずここでは後置型および前置型について考察し、標識介在型については後で別個に扱う。

後置型および前置型の出現頻度を比較すると、主要部名詞の統語役割が主語である場合と、非主語の場合（目的語・付加的補語・非節内要素のみ。所有者名詞の場合を除く）とで、大きな違いがあることが分かる。主語の場合には後置型が多いの対し、非主語の場合には前置型が多い。以下では、主語の場合、非主語の場合、所有者名詞の場合に分けて論じていく。

3.2.1 主語の場合

主要部名詞が主語の場合、後置型が 442 例中 395 例 (89%) と、圧倒的に多い。語彙化したものを除くと割合が少し低くなるが、それでも 271 例中 225 例 (175+50)(83%) と、圧倒的に多い。したがって、主要部名詞が主語の場合、後置型が好まれると言ってよいだろう。後置型の例を挙げる。

- (51) ?əphlòuN [?ò chə] ləphá
人 飲む 物 pl
「酒を飲んでいる人々」(V-03.29)
- (52) thó [mächəN mənī] θiləphá
鳥 助ける 人間 pl
「人間を助ける鳥たち」(II-01.1)
- (53) ?əkhúthò [lə- bádəN lóθà bá] nó
先端 NEG 同じ (相互) NEG that
「(磁石の)異なる極」(III-01.42)
- (54) li [?ódəin wè lə- thí klà] θiləphá
空気 混じる (前もって) LOC 水 間 pl
「水の中に混じている空気」(II-09.7)
- (55) chə?óuNkàijè [?ó lə- ?əthò] nó
綿雲 ある LOC 高所 that
「高いところにある綿雲」(III-05.25)
- (56) lənànnàn [li ?ó dòuN phəN] θè
一部 行く 住む 町 中 pl
「都会に出て行って住んでいる人の一部」(IV-06.15)

- (57) phlòuN pəjànkhāN [ʔányú náu làn θáinkhāN phəN] lə- yà
 カレン ビルマ国 盗む 入る 下る タイ国 中 一人
 「タイに密入国したビルマ側のカレン人のひとり」(IV-07.7)

一方、前置型は出現数が少なく、442 例中 32 例である (7%)。語彙化したものを除くと全体に占める割合は少し高くなるが、それでも 271 例中 31 例 (11%) である。前置型が使われないという傾向は、関係節が単独の動詞からなる場合、つまり、短い関係節の場合に顕著である。今回の調査では、前置型の中に単独の動詞からなる関係節が見つからなかった。また、これまで収集したデータの中にも 1 例も見あたらないので、単独の動詞は名詞を前から修飾できない可能性が高い。

けれども、前置型の存在は重要である。なぜなら、前置型と後置型の選択は気まぐれではなく、主要部名詞の「特定性 (specificity)」が関連していそうだからである。本稿では「特定性」を、「与えられた文脈において名詞が唯一の対象を指示する可能性の度合い」と定義する。しかし特定性を客観的に測ることは難しい。そこで、固有名詞⁵、人称代名詞、および人称代名詞で修飾された名詞は特定性が高いと思われ、かつ、客観的に他と区別することもできるので、これらを本稿では「高特定性名詞 (こうとくていせいめいし)」と呼び、特定性を測る一助としたい。以下に見るように、主要部名詞が主語であってかつ前置型が使用された場合、主要部名詞はこれらの高特定性名詞であることが多いのである。下に例を挙げる。

- (58) [ʔóthō thàin] jə lə- yà
 残る (再度) 1sg 一人
 「残された私」(V-03.145)

- (59) [ʔó phlòuN khānkəNāN phəN] khólòNphàθəN
 ある カレン 州 中 ドーナ山脈
 「カレン州にあるドーナ山脈」(V-06.64)

- (60) [ʔé chəchá] pháθúyè lə- yà
 愛する 民族 (人名) 一人
 「自分の民族を愛するパートゥーゲー」(V-04.34)

- (61) [li ʔó bá khānməjā khó] pháθúyè lə- yà
 行く 住む (経験) 外国 側 (人名) 一人
 「外国に住んでいたことのあるパートゥーゲー」(V-04.63)

- (62) [xilà chəinprāN tɛ] ʔə- mé nó
 美しい 清らかな (強意) 3sg 顔 that
 「美しく清らかな彼女の顔」(V-05.18)

- (63) [θəN blāN thānbà] chəθàbāncútkhiláibéin
 三 回 なる (雑誌名)
 「3号目になる <若き民族の力> 誌」(IV-02.3)

⁵一般名詞であっても、物語において特定の登場人物を指す場合にはここに含む。

前置型 32 例のうち、語彙化していないと思われる 31 例を見ると、うち 9 例において上のような高特定性名詞が主要部になっている。一方の後置型の場合、前置型を許す可能性のある「長い」関係節のうち、語彙化していないと思われる 50 例を見ると、うち、高特定性名詞が主要部になっているのは次の 2 例のみであった。

(64) khìchìphōN [?ó lə- θéiN khìcōN]
 トラの一種 いる LOC 木 先端
 「木のとっぺんにいたトラ」(III-03.46)

(65) ?ò thán wê ?əwê mó [?ó ?ə- cú nī bòn chàu] nó
 飲む (継続) (強意) 3sg 煙草 ある 3sg 指 二本 隙間 that
 「2本の指にはさんだタバコをずっと吸い続けた」(V-04.199)

まとめると、前置型では関係節 31 例のうち 9 例において主要部名詞が高特定性名詞であり、後置型では 50 例(長い関係節のみ)のうち 2 例のみが高特定性名詞である。これに基づきカイ 2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2=9.97$, d.f.=1, $p < .01$)。したがって、前置型の場合には、後置型に比べて高特定性名詞が主要部名詞になっていることが多いと言える。まだ推測の域を出ないけれども、主要部名詞が高特定性名詞であることが多いということから、主要部名詞が関係節の主語に相当する場合の前置型関係節の機能は、主要部名詞の指示範囲を制限することではなく、主要部名詞の対象物に何らかの新しい情報を付け加えることであるのかもしれない。このような機能は、英語の非制限的関係節 (non-restrictive relative clause) を思い出させる。まだ結論は出せないが、これは十分にあり得ることだと思う。

しかし、長い前置型関係節 31 例のうち、残りの 22 例の主要部名詞は高特定性名詞ではない。次のような普通の名詞である。

(66) [thəlōN khwái lə- ?əlānkhaiN] ?əyāiN?əcōN
 過ぎる ~してしまう LOC 後ろ 事柄
 「既に過ぎ去ってしまったこと」(V-05.19)

(67) [yê lānkhaiN] phúðiprí θiləphá
 来る 後ろ 若者 pl
 「将来の若者たち」(III-07.14)

(68) [mə- dúcā ciklā thəjəpràthá wê dò] khānkəNāN
 IRR 栄える 賑わう 知れ渡る (強意) 今後 地域
 「今後発展する地域」(III-17.27)

(69) [dú thán lānkhaiN] phúðiprí θiləphá
 大きい なる 後ろ 若者 pl
 「今後偉くなっていく若者たち」(III-07.14)

これらの例において前置型が用いられている理由は明確ではない。ただ、先行文脈で同一の名詞が現れている、あるいは、話し手が特定の指示対象を念頭に置いている、などの条

件により、このような例における主要部名詞の特定性が高まっている可能性はあるだろう。この問題については今後の課題としたい。

なお、先に述べたように、短い関係節の場合には後置型しか用いられないため、高特定性名詞の場合にも後置型しか現れない。次のような例がある。

(70) kəchân [θi] ʔə- ʔòN phòN
象 死ぬ 3sg 腹 中
「死んだゾウの腹の中」(I-09.22)

(71) chəʔàʊ [chînàn]
猿 座る
「座っているサル」(III-12.19)

今回の調査では、短い後置型関係節 323 例 (語彙化したものを除くと 175 例) のうち 7 例の主要部名詞が、高特定性名詞であった。

以上の議論をまとめておく。

- 主要部名詞が主語の場合、後置型と前置型とでは、基本的には後置型のほうが好まれる。特に、短い関係節の場合には後置型しか使えない可能性がある。
- 長い関係節の場合には前置型も現れる。これは主要部名詞が高特定性名詞である場合に好まれる選択である。

3.2.2 非主語 (所有者名詞を除く) の場合

調査の結果を見ると、主要部名詞が非主語 (目的語・付加的補語・非節内要素。所有者名詞を除く) の場合には、主語の場合と違い、前置型が多く使われていることが分かる。目的語の場合には 100 例中 84 例 (89%)、付加的補語の場合には 44 例中 35 例 (80%)、非節内要素の場合には 29 例中 16 例 (55%) が、前置型だった。語彙化したものを除くとこの傾向はさらに顕著となる。全体から語彙化したものを差し引いたときの百分率は、目的語の場合は 92%(91 例中 84 例)、付加的補語の場合は 92%(38 例中 35 例)、非節内要素の場合は 80%(20 例中 16 例) である。したがって、非主語の場合、前置型が好まれると言ってよいだろう。以下に、目的語・付加的補語・非節内要素の順に例を挙げる。

• 目的語

(72) [ʔwàʔwà chônmon thá wè] lə- cón nó
(人名) 考える (保持) 前もって 一箇所
「オワオワが前から考えていた一件」(V-05.88)

(73) [nèʔán tè] cō
信じる (強意) お兄さん
「(オワオワが) 信じていた彼氏 (恋人)」(V-05.95)

- (74) [nə- phî tàin ʔán] kú
 2sg 祖母 作る 食べる 菓子
 「お前のおばあさんが作って食べる菓子」(V-02.13)
- (75) [tháin dè cá] klònləkōun yàn
 編む INS 竹ひご シュエダゴンパゴダ 絵
 「竹ひごで編んだシュエダゴンパゴダの絵」(V-02.24)
- (76) [jə- lə] chəkhlaïn nó
 1sg 語る 話 that
 「私が語った話」(006.94)
- (77) [ʔəθiwé θóuin làn thá] chəpúchəbòn θiləphá
 3pl 植える (下方) (保持) 植物 pl
 「彼らが植えておいた植物」(II-04.9)
- (78) [hə- bá θámé tháu] phúxā
 1pl (当為) 恐れる 最も 昆虫
 「我々が最も恐れなければならない昆虫」(II-12.2)
- (79) [pə- θá thán θá làn] lì
 1pl 呼吸する (上方) 呼吸する (下方) 空気
 「私たちが吸ったり吐いたりする空気」(II-13.3)
- (80) [thón làn tháin] bú
 精米する (下方) (累加) 米
 「精米した米」(III-02.26)

● 付加的補語

- (81) [θánkhlàn làn] ʔəklà lə- nì
 水祭り 下りる 真ん中 一日
 「水祭りが行われる真ん中の日」(V-06.39)
- (82) [θəwài chə] ʔəyāin
 吸う 物 力
 「(磁石が)物を吸い寄せる力」(III-01.10)
- (83) [dùilá yé ké thán θí] chəʔəlānklè
 蠅 来る なる (上方) 傾向がある 場所
 「ハエが発生しやすい場所」(II-12.16)
- (84) [θéinthò ʔó] wāplàn
 切り株 ある 原っぱ
 「切り株がある原っぱ」(III-12.4)

- (85) [phíθətài mítóphú] láiblai
 注意を促す 少女 手紙
 「少女達に警告する手紙」(IV-08.1)

● 非節内要素

- (86) [kέ thán nū θài] ?əkhánthài
 なる (出現) (必然) 酒 始まり
 「(水が) 酒になった始まり」(IV-05.1)

- (87) [thàθəwài càulé chə] ?əyāin
 磁石 引く 物 事柄
 「磁石が物を引っばるとのこと」(III-01.1)

- (88) [bòn làn θài] θó
 注ぐ (下方) 酒 音
 「酒をつぐ音」(V-03.57)

- (89) [mùmémé chəcə5 làn] ?əljāphàn
 太陽 反射する (下方) 光
 「太陽(の日差し)が反射した光」(II-10.18)

- (90) [mídòun phàn θùriθùri] ?ənàin
 電球 光る チラチラ 傍ら
 「電灯がチラチラと光るかたわら」(V-03.98)

- (91) [phlòun dòunləkòun θè lì thóunlī tōun
 人 ヤンゴン pl 行く 踊る ドン
 lə- cínkəpù] bìdì?òkhwè nó
 LOC シンガポール ビデオテープ that
 「ヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン [カレンの民族舞踊] を踊った (のを撮った) ビデオテープ」(016.34)

ところで、主要部名詞が主語の場合、短い前置型関係節は現れなかったが、非主語の場合は短い前置型関係節も現れることがある。

- (92) [?é] thìθò
 愛する 友人
 「愛する友」(016.49)(目的語)

- (93) [?óphlé] mūmì
 生まれる 日
 「誕生日」(付加的補語)

主要部が非主語のときに前置型が好まれるのは明らかだが、後置型も見てみる必要がある。後置型の例を挙げる。

• 目的語

- (94) thədò [tháin nī dè θéinklànkláinlé]
キンマ入れ 編む 得る INS (木の一種)
「インド菩提樹(の一種)で作ったキンマ入れ」(V-02.59)

- (95) ?əcá [pətòN lə- já]
人生 築く LOC 前
「これから築く人生」(IV-03.11)

• 付加的補語

- (96) cì [mə- xwè ?án kháuchwē]
金 IRR 買う 食べる ソバ
「ソバを買って食べる金」(V-03.88)

• 非節内要素

- (97) θà [?é phlòuN chè phlòuN chəxilà]
心 愛する カレン 民族 カレン 文化
「カレン民族やカレン文化を愛する心」(V-04.214)

意味的に見ると、主要部名詞が非主語の場合、前置型では関係節が個別的な事象および一般的な事象の両方を表すことができるのに対して、後置型の関係節は一般的な事象しか表さないという傾向があるようである。例えば、次の(a)の前置型関係節は、特定の時間・場所において特定の行為者が草履を部屋の中で履いたということ、例えば、「私が昨日、部屋の中で履いた」という個別的な事象と、特定の場所・時間・行為者に限定しない「部屋の中で履く」という一般的な事象を表すことができるが、(b)の後置型関係節は後者の一般的な事象しか表すことができない。おそらく、主要部名詞が非主語の場合に前置型が好まれるのは、前置型のほうが後置型よりも意味的に限定されないということに関連しているように思われる。

- (98) a. [tháu lə- dàu phòN] khánphài nó
履く LOC 部屋 中 草履 that
「(私が昨日)部屋の中で履いた草履 / 部屋の中で履くための草履」

- b. khánphài [tháu lə- dàu phòN] nó
草履 履く LOC 部屋 中 that
「部屋の中で履くための草履」

このような意味的特徴は、後置型の関係節が主語を従えることができないことに起因するのかもしれない。行為者が「抑圧」されることによって、特定の行為者による行為ということが意識されなくなり、そのために一般的な事象を表すという性質が生じるのではない

か。なお、主要部が主語の場合には、主要部名詞として主語が現れているためか、後置型であっても、個別的な事象も一般的な事象も表すことができるようである。

以上をまとめると次のとおりである。

- 主要部名詞が非主語（目的語・付加的補語・非節内要素）の場合、後置型と前置型とでは、前置型のほうが好まれる。
- 意味的に見ると、前置型は個別的な事象と一般的な事象の両方を表せるのに対し、後置型は一般的な事象しか表さない。この意味上の違いが、前置型が好まれるという傾向につながっているように思われる。

3.2.3 所有者名詞の場合

所有者名詞が主要部になった全 27 例のうち、後置型は 16 例 (59%)、前置型は 11 例 (41%) であり、主語の場合と同様にやはり後置型の使用が多いようである。なおかつ、前置型 11 例のうち、3 例において、主要部名詞が「高特定性名詞」（固有名詞・人称代名詞・人称代名詞で修飾された名詞）であった。次に示す。

(99) [θàucà lə- ʔó bá] cò
 誠実さ NEG ある NEG お兄さん
 「誠実さのないお兄さん」(V-05.116)

(100) [θóθáN ʔá nànpòŋná dú] díθó
 機知 多い 知恵 大きい カエルの一
 「機知に富み、知恵のあるカエル君」(III-03.55)

(101) [ʔəjáu dú tháu] nānxwàkhlóuN
 年齢 大きい 最も 鳥の一
 「一番年とっているナンホワクロン鳥」(III-10.21)

一方、後置型 16 例中、高特定性名詞は皆無であった。次に挙げるように、高特定性名詞以外の例ばかりである。

(102) həməni [chəθíchəbá ʔó ʔá]
 人 技能 ある 多い
 「技術の高い人」(I-05.13)

(103) thíkhāN dōuNthāN [chəkhū chəkhléiN báγō] ləphá nó
 国 地域 暑さ 寒さ 均等な pl that
 「温暖な国や地域」(III-16.3)

(104) phlòuN [cìcá ʔó] θèləphá
 人 財産 ある pl
 「財産のある人たち」(017.18)

したがって、主要部が所有者名詞の場合にも、特定性の高い名詞のときには前置型が好まれるという可能性がある。もしそうだとするなら、主要部名詞が所有者名詞である関係節は、後置型が基本的には好まれるけれども高特定性名詞のときには前置型が用いられるという点において、主要部名詞が主語の場合に類似しているということになる。

このことは、次の (105a) の関係節が、(105b) ではなく、実は (105c) のような「二重主語文」に関係づけられる可能性を物語っている。

- (105) a. ʔaiθài [ʔə- nâ thô] nɔ́
 仙人 3sg 鼻 長い that
 「鼻の長い仙人」(III-04.5)
- b. ʔaiθài ʔə- nâ thô mā
 仙人 3sg 鼻 長い (強意)
 「仙人の鼻は長い」
- c. ʔaiθài jò ʔə- nâ thô mā
 仙人 この 3sg 鼻 長い (強意)
 「この仙人は鼻が長い」

しかし、これは「二重主語文」の大主語が一般文の主語と同種類のものであることを前提とした場合の仮説である。二重主語文の大主語が一般文の主語と同じであることを証明するためには、これとは別個に緻密な議論が必要である。ただし、基本的には後置型が好まれるけれども高特定性名詞のときに前置型が用いられるという、上で見た傾向自体が、二重主語文の大主語が一般文の主語と同種のものであることの証拠のひとつとなる可能性はある。この問題は本稿で論じることのできる範囲を超えているので、「所有者代名詞を主要部名詞とする関係節」が、実は「主語を主要部名詞とする関係節」に含まれる可能性を指摘するのみにとどめておく。

3.2.4 後置型と語彙化

ここで後置型と語彙化の関係について指摘しておきたい。語彙化はもっぱら後置型においてのみ見られる。今回調査対象としたすべての関係節のうち、語彙化していると思われるものがのべ 195 例あったが、うち、194 例が後置型だった。(40)～(50) に示した語彙化の例も、すべて後置型である。後置型以外で語彙化していると思われる例は、次の前置型の 1 例のみであった。

- (106) [cɔ́ chə] chərá
 炒める 物 先生
 「調理師」(V-03.31)

このように、後置型は語彙化に強く関連している。このことから、後置型は、関係節を形成する方法であると同時に、この言語における最も強力な語形成操作の一種であると見なすことも可能かもしれない。

3.3 標識介在型

最後に標識介在型を見てみよう。下に、主要部の統語役割別に標識介在型の例を挙げる。

• 主語

- (107) θéinθá thî lə- [ʔə- yì] nó
 果物 水 Lə 3sg 良い that
 「良い果物ジュース」(II-13.17)

• 目的語

- (108) khānməpā lə- [ʔəwè thòN bá] θè nó
 外国 Lə 3sg 着く (経験) pl that
 「彼が行ったことのある外国」(V-04.49)

• 付加的補語

- (109) jádòʔwà lə- [ʔəwédá thàv ʔə- náthî yòN nó]
 ハンカチ Lə 3sg 拭く 3sg 鼻水 終える that
 「彼(風邪の患者)が鼻水を拭き終えたハンカチ」(II-13.15)

• 非節内要素

- (110) θí xwè lə- [ʔəwè bjàn blá thúpəyú] nó
 薬 値段 Lə 3sg 治す 治る フクロウ that
 「彼がフクロウを治してやった薬代」(I-03.34)

調査の結果を見ると、標識介在型は、現代ポー・カレン語東部方言においてはあまり好まれないとの印象さえ受ける。標識介在型が現れたのは、全 642 例中、20 例のみ (3%) だった。

実は、標識介在型が使われる条件については分からないことが多い。本稿では、次の 2 点について指摘しておくにとどめる。

第一点は構造の明確化である。下の例を見られたい。⁶

- (111) ʔəθí mə- dá báθà [mə- dú phí
 3pl IRR 見える (希望) 2sg 撮る (授益)
 ʔəθí] ʔəyàn nó chī ló
 3pl 写真 that (婉曲) (強調)
 「彼らは、あなたが(彼らに)撮ってあげた写真を見たがっています」(016.33)

- (112) ʔəθí mə- dá báθà ʔəyàn lə-
 3pl IRR 見える (希望) 写真 Lə
 [mə- dú phí ʔəθí] nó chī ló
 2sg 撮る (授益) 3pl that (婉曲) (強調)

⁶(111) はポー・カレンの友人から筆者に宛てられた手紙に出てきた実例である。

(111) では、関係節部分の文中における役割が、主要部名詞である ၵၢ်ယံၵ်း 「写真」が現れるまで分からない。というのは、動詞 dá は補文を取る動詞なので、関係節の部分が補文と解釈される可能性があるからである。(112) のように標識介在型の関係節を用いれば、主要部名詞が動詞の直後に現れ、なおかつ助辞 ၵ- がその直後に現れるので、文の構造がたちどころに分かる。よって、標識介在型が構造を明確化したいときに使われる可能性はある。

第二点として、標識介在型については、ポー・カレン語話者自身の「格式ばった言い方」であるとの内省報告があることを指摘しておきたい。具体的な場面としては、大勢の前での演説や物語の語りなどに使われる。確かに筆者の印象でも、くだけた会話体において標識介在型が使われることは極めて少ないように思われる。標識介在型が、このような文体と結びついている可能性は否定できない。

4 まとめ

終わりに、本稿の考察で明らかになった重要な点を以下に列挙する。

- 主要部名詞が主語である場合、後置型が多く使われる。前置型も使われることがあるが、前置型は高特定性名詞の場合に好まれる選択である。
- 主要部名詞が非主語の場合、前置型が多く使われる。
- Purser and Tun Aung (1922) で報告された型である標識介在型の出現頻度はあまり多くない。

主要部名詞が主語の場合にのみ後置型が多く使われ、非主語の場合には前置型が多く使われるのはなぜだろうか。ポー・カレン語の基本語順では主語が動詞の前に現れ、非主語が動詞の後に現れるということが、名詞と関係節の順序に影響している可能性はあると思う。しかし、基本語順と同じであるということは逆に、ある音連続が関係節構造であることを気づきにくくする要因にもなりかねないことには留意しなければならない。

主要部名詞が主語である場合の前置型は、英語の非制限的關係節に似て、主要部名詞の指すものに新しい情報を付け加えるという機能を持っていることを示唆した。しかし、この推測が本当だとすれば、なぜ名詞の前に置かれた関係節がこのような機能を持ち得るのかについては、答えがまったく見出せていない。

主語の場合を除けば前置型が多用されることについては、「関係節」が主要部名詞に前置されるタイプの言語であるビルマ語との接触も原因として考慮に入れる必要があるだろう。ビルマのカレン系言語を見ていると、ビルマ語の影響は様々なレベルで無視できないファクターとして働いているように思われる。ただ、このことを実証するのは難しい。ビルマ人の居住者が多いため言語の接触も頻繁であるはずの西部方言(イラワジデルタ方言)においては、かえって標識介在型に相当する関係節が多く使われるという印象を筆者は抱いており、このことは言語接触について云々することの難しさを物語っている。

このように、今回の調査で明らかになった傾向の原因を特定するのは難しい。これを究明する作業は今後の大きな課題として残されている。

略号

INS=道具・同伴を表す前置詞 / IRR=非現実法を表す助辞 / LOC=場所を表す前置詞 / NEG=否定辞 / pl=複数を表す助辞 / 1sg=一人称単数代名詞 / 2sg=二人称単数代名詞 / 3sg=三人称単数代名詞 / 1pl=一人称複数代名詞 / 2pl=二人称複数代名詞 / 3pl=三人称複数代名詞

資料

本稿の分析に用いた資料は、ポー・カレン語の教科書・雑誌などの出版物に掲載されたエッセイ、民話、短編小説(計57篇)、および、筆者が集めた民話やポー・カレン語で書かれた筆者宛の手紙(計13篇)である。総計は70篇。下に、このうち出版されているものの一覧を掲げる。

- I. 『ポー・カレン語読本第1課程』 phlòun láí p̄ lə- chàn
カレン人用の教科書。10篇の民話・エッセイを含む。
- II. 『ポー・カレン語読本第2課程』 phlòun láí p̄ nī chàn
カレン人用の教科書。14篇の民話・エッセイを含む。
- III. 『ポー・カレン語読本第3課程』 phlòun láí p̄ θ̄n chàn
カレン人用の教科書。17篇の民話・エッセイを含む。
- IV. 『若き民族の力』 ch̄ θ̄abàn c̄t̄kh̄i
タイに住むビルマ国籍のポー・カレンの人々によって不定期に発行されているポー・カレン語の雑誌。本稿でデータとして用いたのはこの雑誌の第7号(1996年12月)で、10篇のエッセイ・短編小説を含む。
- V. 『大学カレン雑誌』 t̄ɛʔkəθ̄ò kəȳin m̄ɛʔgəz̄in (誌名はビルマ語)
1978年にラングーン大学のカレン学生委員会が出版した雑誌。この雑誌はビルマ語、スゴー・カレン語、ポー・カレン語西部方言、ポー・カレン語東部方言の4言語で書かれた様々な文章を載せている。ポー・カレン語東部方言については、6篇のエッセイ・短編小説を掲載している。

本文中に記した I-01.1 などの番号は、これら出版物の筆者の資料中における整理番号である。ローマ数字は上に示した資料の番号に対応する。ハイフンの後の最初のアラビア数字は上記資料中のテキスト番号、ピリオドの後のアラビア数字は文番号である。一方、アラビア数字のみからなる 001.1 などの資料番号は、筆者が集めた民話や手紙などに付した番号で、ピリオドの前が資料番号、後が文番号である。なお、今回用いた資料の総センテンス数は、およそ 6,000 である。

参考文献

- Benedict, Paul K.
(1972) *Sino-Tibetan: a Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard
(1989) *Language Universals and Linguistic Typology (2nd edition)*. Chicago: University of Chicago Press.
- Duffin, C.H.
(1913) *A Manual of the Pwo-Karen Dialect*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Greenberg, Joseph H.
(1966) "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements." (In) Greenberg, J.H.(ed.) *Universals of Languages (second edition)*, pp.73-113. Cambridge/Massachusetts: MIT Press.
- 影山太郎
(1993) 『文法と語形成』東京:ひつじ書房.
- 加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko)
(1995) "The phonological systems of three Pwo Karen dialects." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18.1:63-103.
(1998) 「ポー・カレン語(東部方言)の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113:31-61
(1999) "Two types of causative construction in Pwo Karen (the Eastern dialect)." (In) Shintani Tadahiko (ed) *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Culture Area*, pp. 55-93. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
(印刷中) 「仏教ポー・カレン文字」「キリスト教ポー・カレン文字」『世界文字辞典』東京:三省堂.
(in print) "Pwo Karen." (In) Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds) *The Sino-Tibetan Languages*. Richmond: Curzon Press.
- Keenan, Edward L.
(1985) "Relative clauses." (In) Timothy Shopen (ed) *Language Typology and Syntactic Description II, Complex Constructions*, pp.141-170. Cambridge University Press.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie
(1977) "NP accessibility and universal grammar." *Linguistic Inquiry* 8:63-99.
- Phillips, Audra
(1996) "Dialect comparison among the Pwo Karen of Central Thailand." *Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics* Vol.III:1122-1162.
(1999) *Western Thailand Pwo Karen Text Collection*.(pre-publication draft) Thammasat University and Summer Institute of Linguistics.

(2000) “West-Central Thailand Pwo Karen phonology.” *33rd ICSTLL Papers*:99-110, Ramkhamhaeng University, Bangkok.

(U) Phon Myint

(1975) *bud-dha bhaa saa pui: ka rang pe caa sa muing: (1851-1970)*(The History of Palm-leaf Inscriptions of Buddhist Pwo Karens: 1851-1970 [in Burmese, pp.306]) Rangoon: Dhabye-Oo Sapedaik.

Purser, W.C.B. and Saya Tun Aung

(1922) *A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

白井聡子

(1998) 「現代チベット語の名詞修飾構造」『言語研究』116:59-95

藪司郎

(1988) 「カレン語群」『言語学大辞典』pp.1312-1318, 東京:三省堂.

音素目録

单母音		閉鎖音		声調						
i	i	u	p	θ	t	c	k	ʔ	má	高平調
ɪ		ʊ	ph	th	ch	kh			mā	中平調
e	ə	o	b	d					mà	低平調
ɛ	a	ɔ	摩擦音						mâ	下降調
						ç	x	h	(mə	輕声)
二重母音						y	ɸ			
ai		au	鼻音							
			m	n	ɲ	(ŋ)				
鼻音化单母音			半母音							
		əN	w	j						
aN		oN	流音							
				l						
鼻音化二重母音				r						
eɪN	əuɪN	oɪN								
		aɪN								

Relative Clauses of Pwo Karen (Eastern Dialect)

KATO Atsuhiko

Keywords: Karen, Pwo Karen, relative clause, Tibeto-Burman

There are three kinds of relative clauses in Pwo Karen (Eastern Dialect), which are postnominal type, prenominal type and marked type. The purpose of this paper is to explore the factors which condition the choice of these three. We can see from the survey that (1) when the head noun is the subject of the relative clause, the postnominal type is favored, (2) when the head noun is the non-subject of the relative clause, the prenominal type is favored, (3) the choice of the marked type shows low frequency, and so on.

(かとう・あつひこ 国立民族学博物館)